大斎節 2026年

ナイロビ・カイロ提案 補遺（ローマ、2025年）

世界聖公会一致・信仰・職制常置委員会(IASCUFO)

要約

2024年降臨節に発表されたIASCUFOの「ナイロビ・カイロ提案」（NCPs）は、教会を、真に、唯一で、聖なる、普遍的で、使徒的なものとして新たに構想し、聖公会の人々が新たな創造の希望を世界へもたらすことを可能とするものです。アングリカン・コミュニオンは、神の招きに応え、キリストの体における私たちの場所を見出すことに、はるか昔より自らを捧げてきました。相互依存を認め合う中で、私たちの間に生じることは、地方的、地域的、世界的な規模における私たちの完全性と有効性に影響を及ぼします。2025年12月にローマで開催された会議で作成された本NCPs補遺文書は、当委員会が提出した文書に対する応答に耳を傾ける中で得られた知見を要約するとともに、2026年6月・7月に開催される第19回全聖公会中央委員会（ACC-19）での協議のために、いくつかの修正案を提示しています。

「ナイロビ・カイロ提案」は、私たちのコミュニオンの営みに対する以下の3つの緊急の呼びかけに集約されます：

- **1930年以降におけるコミュニオン構造の発展を確認すること。**1930年のランベス会議がランベス会議を定義した際、すべての聖公会諸教会が母教会である英国教会(The Church of England)を中心に集うという理解を前提としていました。しかし少なくとも1968年以降、この前提は成立していません。現在、英国教会を含むすべての聖公会諸教会は姉妹教会関係にあります。コミュニオンの会員資格はACC（全聖公会中央協議会）の法規によって規定されています。これらの事実を踏まえ、コミュニオンの最新の定義を確立することで、すべての聖公会に属する者たちが共有する信仰、ミニストリー、使命について、真実かつ誠実に語ることが可能となります。

- **一部の諸教会との交わりが損なわれていることを認めつつも、真の交わりは神の賜物として、またキリストが私たちに深めるよう招かれるものとして、なお存在しています。**アングリカン・コミュニオンに属するすべての諸教会は、相違点があるにもかかわらず、「コミュニオンの器」[1]によって助けられながら、互いに生きた関係で結ばれています。私たちは、いかなる単一の加盟教会の決定によって定義されるものではありません。このことにより、私たちはさまざまな形で交わりを表現し、可能な限り高い次元で共に歩むことができます。それは、私たちの分裂についても誠実に向き合い、愛をもって互いに場所を与え合うように促すものです。

- **コミュニオンの指導体制がコミュニオンそのものを反映するよう保証すること。**これは、カンタベリー大主教のコミュニオンにおける特別なミニストリーを、ランベス会議と同様に、ACCと首座主教会議が補完し、完成させているという事実を確認することを意味します。ACCは信徒の声とリーダーシップを包含していますが、私たちはこれらの貢献が強化されることを提案します。各地の首座主教たちは、すでにカンタベリー大主教のコミュニオンにおけるミニストリーを補佐しています。私たちは、この分かち合われたミニストリーの、同僚的な性格を発展させることを提案しています。

変革の必要性を認めそれに応じて行動することは、私たちの証しの完全性を高め、指導者間の同僚性を促進し、エキュメニカルな場と世俗的な場の双方において聖公会の声を強めることでしょう。それは、カンタベリー大主教のミニストリーが証しする、分かち合われた神学的でサクラメンタルな遺産を称えつつ、植民地主義の負の重荷を下ろすことを可能にするでしょう。そしてそれは、深刻な意見の相違がある中でも、暴力と絶望に裂かれた世界において、希望と癒しの言葉を語り、体現するよう、すべての聖公会に属る者たちに促すことになるでしょう。

[1] ①カンタベリー大主教、②ランベス会議、③ACC、④首座主教会議

はじめに

1. 2024年の降臨節に「ナイロビ・カイロ提案」(NCPs）が公表されて以来、世界聖公会一致・信仰・職制常置委員会（IASCUFO）の委員は、寄せられた正式な応答を慎重に検討してきました。IASCUFOは、首座主教会議（「各地域の首座主教たち」と表現されるものも含めて）常置委員会、全聖公会中央協議会(ACC)常置委員会と定期的に協議を続けてきました。また、新カンタベリー大主教のサラ・ムラリー大主教や、エキュメニカルなパートナーとも数度にわたり対話を交わしています。

2. 2025年12月にローマで開催された会議において、私たちはこれらの応答を踏まえつつ、キリスト教一致推進省が最近発表した論文『ローマの主教：エキュメニカル対話における首位性と共歩性（シノダリティ）』（2024年）を検討しました。 カトリック教会は、状況の変化と新たな識別、とりわけ他のキリスト者や教会との対話を通じて、第1バチカン公会議（1869-1870年）の主張を含む教皇教導職の神学を再構築していることが明らかになりました。

3. 同様に、アングリカン・コミュニオンも、一致への聖霊の招きに忠実に応えるため、自らの歴史と主張の再検討と再構築に取り組んでいます。過去100年間でアングリカン・コミュニオンは大きく変化しました。特に、すべての加盟教会の平等性に関する新たな理解が形成されてきました。どの加盟教会も、他よりも「欠くべからず」と突出することはありません（コリントの信徒への手紙一12:22）。とはいえ、旧来の植民地時代的な習慣はあらゆる面で断ち切るのが難しいものです。すべての教会は姉妹関係にあり、互いに交わりを深めることに力を注ぐよう奨励されています。

4. NCPsは、教会が持続的に、唯一で、聖なる、普遍的(catholic)で、使徒的であるという理解に照らし合わせることで、アングリカン・コミュニオンにおけるこれらの発展の歴史と神学を詳述しています（NCP第24-71項参照）。 この信仰と職制に根ざしたNCPsは、あらゆる問題を解決したり、将来の課題を予見したりするふりをすることなく、聖公会の共なる営みにおける次の段階に向けて、実りある枠組みと暫定的な方向性を提示しようとするものです。アングリカニズムの賜物として、私たちの原理的な「多様性」（NCP第60項参照）は、すべてのキリスト者と共に、世界に緊急に分かち合うべき福音の希望のささげ物として残されています。

    - キリストの体は**唯一**であり、その一致は聖霊の「賜物」であると同時に、各世代が応答すべき「招き」です。聖公会に属する者（及び他のキリスト者）は、洗礼と信仰によってキリストにおいて一つとされると同時に、より完全で、満ち足りた、目に見える交わりへと招かれています（NCP第25-29項参照）。
    - 現在の論争は、**聖なる**生活とはどのようなものかという点に焦点を当てると同時に、可能な限り聖なる方法で、互いに関わり合う機会を提供しています。注意深く慈愛をもって耳を傾け、良心に基づく意見の相違を、敬意をもって示し、互いに強制することを拒むことで、私たちは分裂によって傷ついていると感じながらも、育もうとする唯一の交わりに精力を傾けるのです（NCP第40-48項参照）。
    - 聖書と古代教会が呼びかける**普遍的**(catholic)な証しには、教会間、教会内の論争と識別が解決へ向けて行われる余地が含まれています。洗礼を受けた者の交わりとは、サクラメント的で、共歩的（シノディカル）な共なる営みによって支えられ、恵みによって最後まで忍耐する力を与えられた、巡礼者たちの多様な共同体を意味します（NCP第49-57項参照）。
    - 私たちはまた、**使徒的**な誠実さへの招きも聴きます。これは聖書において神から与えられ、教会の主教たちと諸公会議によって識別される信仰の真理を指します。キリスト教信仰の使徒的な性格は、「エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで」（使徒言行録1:8）へと（NCP第58-71項参照）、諸国民へのイエス・キリストの福音として新たに教えられ、受け入れられ、宣べ伝えられる度に常に更新されるのです。

5. これらの古代以来の教会のしるしに基づいて、またそれらを絶えず参照しながら、委員会として私たちは、NCPsの一つの主要な提案に立ち返りました。

第1の提案： アングリカン・コミュニオンについての叙述の改訂

6. さらなる考察と協議を経て、私たちは、ACC常置委員会及び首座主教らと共に、現在の構造と実態を反映したアングリカン・コミュニオンについてのアップデートされた叙述の、最初の提案に確信を持ち続けています（NCP第73項ff.参照）。

(1) コミュニオンの特性

7. 私たち間の「完全な交わり」（フルコミュニオン）は、すべての聖公会諸教会によって当然視されるものではなく、探求されるべきものです。聖書的、神学的、サクラメント的、社会的、宣教論的な交わり（コイノニア）の含意は、聖公会のキリスト者及び教会としての私たちの思考、祈り、行動を、これまで以上に深いところで鼓舞し、導き続けねばなりません。これこそが、唯一の、普遍的かつ使徒的な信仰と職制における「完全な交わり」（フルコミュニオン）が、あたかも達成されたかのように単純に主張できない所以です。同時に、私たちは、偶然の結びつきや連合(federation)に甘んじることはできません。洗礼と共通の信仰に根ざす教会の本質的な一致とカトリック性（普遍性）は、あらゆる可能な方法で強化されねばなりません。 NCPsは、以下の聖公会の絆を強調しています。(i) 典礼や教会法を含む信仰と職制における共有の遺産、(ii) 宣教における相互奉仕、(iii) 共に協議を行うことへの献身、(iv) 過去と現在における、カンタベリー大主教座との歴史的なつながり。これらの絆は、たとえ不完全であっても（NCP第76項）、私たちを交わりの道へと歩ませ、また「ある人たちの習慣に倣って集会をやめたりせず、かえって励まし合いましょう。かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか」（ヘブライ人への手紙10:25）という助言に従う助けとなります。

8. 普遍的かつ使徒的な信仰と職制を維持し、広めようとする試みは、決して教会の緊急かつ恒久的な使命である福音の正統的な真理を明らかにし、単に主観的な意図を示すものでもありません。私たちは、アングリカン・コミュニオンの理想を現実的かつ希望に満ちた形で再提示するものです。NCPsの付記で述べていますが、「コミュニオンの諸教会は、「私たちすべてが、信仰と神の子の知識において一つとなり、完全な者となって、キリストの満ち溢れる成熟した年齢に達する」（エフェソの信徒への手紙4:13）よう招かれているゆえに、（NCP第51項参照）、一つの信仰と職制を擁護し広めようとするのです。完全な交わり（フルコミュニオン）は容易ではありませんが、それは主が、裏切られた夜に祈り、最優先とされたことでもあります（NCP第17,76項参照）。したがって、多くの人々がそのような一致は決して達成されず、私たちの相違と分裂が私たちを打ち負かし、単に意見の相違を認めるだけでよいと想定する時であっても、私たちは前進し続けるのです。私たちは、慈愛をもって、互いの相違に向き合い続けるための公平かつ柔軟な手段を見出す必要があるのです。「互いに歩み寄る」とは何を意味するのか（NCP第35-39項）を問わねばなりません。たとえ「距離を置いて」歩むことを意味する場合でも（NCP第44-48項）、私たちは分かれてではなく、共に歩むためにこれを行うのです。このような多様な歩みは、私たちに「互いに最高度の交わりを育むために相互に求め合う」（NCP第76項）ことを可能にするでしょう。

(2) カンタベリーとの歴史的つながり

9. 1930年のランベス会議において、集められた主教たちは、アングリカン・コミュニオンを、「カンタベリーの主教座と交わり(communion)の内にある教区、管区、あるいは地域諸教会によるフェローシップ(fellowship)」と定義しました（決議第49号）。このステートメントは、アングリカン・コミュニオンは、「英国教会との完全な交わり（フルコミュニオン）」によって定義される教会の集まりとするものと、主教たちは彼らの主教書簡で記しています（NCP第12, 74参照、強調加筆）。しかしその後の一世紀において、「アングリカンであることの意味」に対する私たちの集合的な理解は、主に1968年の全聖公会中央協議会(ACC)の設立と、1978年の首座主教会議の創設を通じて、重要な発展を遂げました。現在、ACCの法規（NCP第70, 74参照）に明記されているこれらの第3、第4の「コミュニオンの器」

(Instruments of Communion)は、「カンタベリー大主教」（第1の器、597年に遡る）及び「ランベス会議」（第2の器、1867年より）と協働して機能します。

10. NCPsが指摘するように、英国教会とカンタベリー大主教は、「紛争や意見の相違における上訴裁判所や唯一の代弁者」として機能したことは一度もありません。それは「コミュニオンに加盟する諸教会の平等性と相互性」に反するからです（NCP第63,78項参照）。むしろコミュニオンは繰り返し、初期から重視してきた「歴史的主教職」を再確認してきました。これは、1888年のシカゴ・ランベス四綱領（NCP第57, 60項参照）の言葉です。「主教たちの共同の協議」という、非中央集権的、非強制的な平等な者たちの共同体としての豊かな経験（1930年ランベス会議決議第49号、NCP付記参照）から発展し、1968年と1978年のランベス会議は、ACCと首座主教会議を補完的なパートナーとして創設しました。これら四つの器が連携することで、聖書と共通の伝統に基づく広範な合意を基盤とし、宣教における一致の礎として、聖公会の信仰と職制を明確に示していくことを目指しています。

11. 前世紀におけるアングリカン・コミュニオンのこの変遷を想起することは、すべての聖公会に属する者が共有する、カンタベリー大主教座との生きたつながりを理解する助けとなります。このつながりを「歴史的に重要な(historic)」（注：「歴史上の(*historical*)ではない）と表現することは、決してそれを歴史の中に押しやるものではありません。「歴史的主教職」(*historic episcopate*)という表現が、今日の教会の営みを形作る古代の制度を指すように、「カンタベリーとの歴史的つながり(*historic connection*)」は、同時に次の3点を示します。すなわち、(i)コミュニオンの諸教会の多くにとっての宣教的な起源であること、(ii)古代の使徒性の象徴としてのカンタベリー大主教座の位置づけ、(iii)「コミュニオンの器」としてのカンタベリー大主教との継続的な関係性。これは人格的で司牧的な賜物ですが、受け入れられる必要があるものです（NCP第76, 78-79項参照）。したがって大主教は、「兄弟姉妹として、また同輩として、とりわけ、ランベス会議と首座主教「会議」において、奉仕し、励まし、説得するように招かれているのです」。これらは「コミュニオンの信仰と職制に対する同僚的(collegial)、共同体的(communal)な責任を担う」ものなのです（86, 78項、85, 62項参照）。

12. カンタベリー大主教は、「独自の教会政体と教理を持つ特定の教会の首座主教」として奉仕するため、コミュニオンの他のすべての教会と完全に共有されるわけではありません。カンタベリーとの完全な交わり（フルコミュニオン）が、常にすべての加盟教会にとって可能とは限らないのです（NCP第63,7,79項参照）。やはり、すべて聖公会に属する者は、可能な限り、あらゆる方法で共有する交わりを強化すべきです。同時に、IASCUFOは、アングリカン・コミュニオンにおいて、その多くのネットワークが、カンタベリーや英国教会、あるいは他のいかなる加盟教会を中心とせず、それらによって組織されていないという事実に感謝すべきだと考えます（NCP第56, 68項参照）。これらの多中心的なグループは独自の取り組みを支え、アングリカン・コミュニオンのみならず、より広範なキリストの体を豊かにすることを求めるのです。

13. カンタベリーとのコミュニオンのつながりにもかかわらず、英国教会は、聖公会の家族の信仰を担うことはできず、またそう求められるべきではありません。聖なる交わりの招きは、すべての者が等しく応答し、最大限の誠実さをもって受け止めるべきです。コミュニオンの諸教会は、許容できる最低限の交わりではなく、可能な限り最高の交わりを追求するよう招かれています（NCP第31項参照）。ここでもまた、カンタベリー大主教の一致のミニストリーは、他の器を補完するものなのです。

第2の提案： 器のリーダーシップの拡大

14. NCPsの第2の主要提案に関して、私たちの問いは同様のものです。カンタベリー大主教のコミュニオンにおける人格的、司牧的ミニストリーは、首座主教会議常置委員会を構成する各地の首座主教たちの助けによって「補佐され、拡大され」得るのか。これは2024年の首座主教会議からの提案であり、提示された第2の提案の形成に寄与しました（NCP第82項、63項参照）。

15. 「コミュニオンの指導体制はコミュニオンそのものの姿を示すべきである」と論じること（NCP第85項）は、公平性、正義、文脈性、宣教に関する問題、ならびに、聖公会のアイデンティティに関する問題を提起するものです。平等と相互尊重の現れとして、分かち合われた召命、招集、代表性を探求することは、当然の進化を示す可能性があります（NCP第63、68、74項参照）。このようにして、英国教会を含むコミュニオン全体も、かつての植民地主義的思考を超え、グローバルなキリスト教の多中心性を認識する機会となるでしょう（NCP第18-21項参照）。ここで私たちは、NCPsの第2の提案について、2点の修正を提案したいと思います。

⑴ 第1の器の同僚的な分かち合い

16. 有益なフィードバックを受け、ACC常置委員会全体とサラ大主教とのさらなる協議を経て、IASCUFOは第2提案の第1部分、「ACCの輪番会長(President)制」（第84項）の見直しを提案するものです。カンタベリー大主教との潜在的対立、会長の「顔」に反映される地理的かつ（もしくは）神学的多様性の不整合、不規則な事務所の資金、人員配置など、さまざまな観点から適切な疑問が提起されています。*望ましい方法は、カンタベリー大主教が、地域の首座主教たち（首座主教会議常置委員会を構成）を招請し、コミュニオンにおけるカンタベリー大主教自身のミニストリーを同僚的な方法で分かち合い、そのような取り決めを評議会のような形で正式化する検討を始めるシンプルな方式です。このプロセスは3〜6年かけて進められるでしょう。*

17. 私たちは以前、4つの器のミニストリーにおいて、「ますます協働的」かつ同僚的なパターンが見られることに留意し、「少なくとも2016年以降、首座主教たちは首座主教会議のセッションの議長職を交代で務めており、首座主教会議常置委員会が事前に議題の形成に貢献してきた」ことに注目しました（NCP第83項参照）。ジャスティン・ウェルビー大主教もまた、各地の首座主教に対し、その管轄内の諸教会への牧会的支援を提供するよう求めました。ウェルビー大主教の在任最終日（2025年1月6日）、彼は総主事宛てに書簡を送り、自身の不在時には各地の首座主教たちが、カンタベリー大主教のコミュニオンにおけるミニストリーのあらゆる側面を引き継ぐように要請しました。これらは、カンタベリー大主教のミニストリーの重要かつ積極的な進展でしたが、それは暫定的なものであり、一人の大主教の判断に依存していました。

18. 後者の進展を正式化することには、いくつかの利点があると考えられます。

- 首座主教会議常置委員会（または各地の首座主教とも呼ばれる）は、世界的な家族の奉仕における第1の器として、カンタベリー大主教の司牧職を共有し続けることができます。
- 提案されている首座主教評議会における各首座主教は（カンタベリー大主教と同様に）、新たな管区の創設や、新たな首座主教の就任式など、さまざまな場面でコミュニオンを代表することができます。
- こうした場合、該当する主教はカンタベリー大主教の代理としてではなく、まさにアングリカン・コミュニオンを代表します。これは、コミュニオンの多様な顔は常に英国教会の顔であるべきではないという原則に基づくものです。
- カンタベリー大主教は、他の者を招く選択肢が有益であることが示される場合でも（NCP第88項参照）、ほとんどのエキュメニカルな場において、引き続きコミュニオ

ンの推定代表者として奉仕し続けることができます。
- この分かち合われるミニストリーの実践的形態は、カンタベリー大主教とその同僚たちが、このような形で相互協力関係をさらに深化させる過程において、時間をかけて見極める必要があります。これには現行の5地域構成の見直しも含まれる可能性があります。

19. *この提案がカンタベリー大主教及び各地域の首座主教らに受け入れられる場合、私たちは、その構造、名称、権限範囲を彼らが決定することを提案します。ACC-19が、このような進展を推奨することは適切でしょう。*

(ii) ACC**の会長**(President)

20. ACC-19は、カンタベリー大主教が現在務めるACC会長(President)職の役割を再検討することで、前述した提案への道筋をつけることもできます（NCP第85項参照）。前述の通り、ACCの会長は主に象徴的かつ職権上(*ex officio*)の役割を担っています（第84項）。さらに検討した結果、IASCUFOは、ACCにおける議長(Chair)、副議長(Vice-Chair)の立場を考慮すると、会長の役割が不必要な複雑さを生じさせているとも考えます。今日のACCの活動において、「会長がそう言っているからできない」などと言うことは考えられません。ACCの法規も、ACCが職務を執行するために、必ずしも会長が「出席」する必要はないと規定しています（第7条1項）。*この問題についてのACC常置委員会との協議を経て、私たちは、「会長」(President)の役割がもはや有益なものではない点で合意しました。コミュニオンの第1の器として、カンタベリー大主教は、常置委員会の他の5人の首座主教メンバーと同様に、発言権と投票権を有する職権上のメンバーとして、ACC及びその常置委員会に留まることを、私たちは推奨します。*

21. 私たちは、このような変更にはいくつかの利点があると考えます。

- 会長職を廃止することで、ACCは組織構造を簡素化し、議長の役割を明確化できます。
- この変更は、常置委員会における信徒のリーダーシップの強化に関するIASCUFOの提案と根拠（NCP第94項）にも沿うものです。
- カンタベリー大主教はすでに、ACC及びその常置委員会（5人の首座主教を含む）と、同僚的な形で協働しています。
- 現状では、誠実な仲介者かつ一致に奉仕するために、コミュニオンのすべての教会に平等に仕える責務を負っている「アングリカン・コミュニオン・オフィス」（ACO、他機関も含む）の活動を妨げています。

22. *ACC-19 は、その法規の他の改正と並行して、会長の役割を削除するかどうかを検討することになります。NCP（第89項参照）で述べられているように、カンタベリー大主教の見解は、法規が改正されない限り、カンタベリー大主教が ACC の会長であり続けるという理由からも、極めて重要なものとなるでしょう。*

結論

23. 聖公会に属する者が、自分たちの教会について考える時、そのほとんどは当然ながら自らの教区やパリッシュの教会に焦点を当てます。私たちは自らの共同体においてイエスを見出し、仕え、福音に聴き、友人や家族、隣人、企業、国家と共に癒し、教え、正義、その他を分かち合うことを求めます。私たちの中には、礼拝や宣教の諸指標、より広いキリストの体への貢献を通じて、聖公会のこうした取り組みに焦点を当てる人々もいます。しかし、私たちのコミュニオンの構造や、それぞれの器の機能について、日々考察することを日常の働きとする者はほとんどいません。それでも、これらの構造は、世界中の教会で私たちがイエス・キリストの交わりを分かち合う方法を促進したり、阻害したりする可能性を秘めているのです。

24. 「ナイロビ・カイロ提案」（ローマでの会議における前述した精緻化を踏まえ、今後見直される見込みですが）は、教会を真に、唯一で、聖なる、普遍的で、使徒的なものと、あらためて構想し、聖公会が新たな創造の希望を世界に運ぶことを目指すものです。アングリカン・コミュニオンは、一致への神の招きに応え、「キリストの体」における自らの位置を見出すことに引き続き献身します。相互依存を認め合う中で、私たちの間に起こることは、地方的、地域的、そして世界的に見て、私たちの完全性と有効性にとって重要なのです。

25. この提案は、私たちの共通の営みに対する3つの緊急の呼びかけに集約されます。

- 1930年以来のコミュニオンの構造における進展を認めること。
- 一部の教会間で交わりが損なわれていることを認めつつも、真の交わりは、神の賜物として、また、キリストが私たちに深めるよう招くものとして、なお存在していることを確認すること。
- コミュニオンのリーダーシップが、コミュニオンそのものを反映するように、確かなものとすること。

26. 変化の必要性を認め、それに応じて行動することは、私たちの証しの誠実さを高め、指導者間の同僚性を促進し、エキュメニカルな場と世俗的な場の両方で、聖公会の声を強めるでしょう。また、深刻な意見の相違がある中でも、すべての聖公会に属する者が、希望と癒しの言葉を語り、体現することを促すことでしょう。

27. 変化の必要性に向き合わず現状維持を試みるならば、それは実質的に、私たちが直面する問題に対して、誠実かつ建設的に向き合うことを拒み、より激しい分裂の可能性を高めることになります。この現実を踏まえつつ、教会とは常に改革され続ける存在であることを思い起こすことで、勇気づけられるのです。主が再び来られるまで、絶え間ない検証と探求が必要なのであり、またそれを待望しなければならないのです。 ゆえに私たちは、一つの体の癒しに奉仕する上で、それに相応しい暫定性を認識しつつ、自らの構造を軽やかに保持しなければならないのです。

28. マイケル・ラムゼーが、カンタベリー大主教に就任する25年前の1936年に出版された彼の偉大な著作『福音と普遍教会(*The Gospel and the Catholic Church*)』の終盤で印象的に記したように、アングリカニズムの「資格証明書」とは、「その不完全さ、すなわち魂に宿る緊張と苦悩である。それは不器用で乱雑であり、整然さや論理を拒む。なぜならそれは、「キリスト教の最良の形態」として自らを称賛するためではなく、その破れ(brokenness)によってこそ、すべての人々が、そこにおいて死ぬ普遍的なる教会を指し示すために遣わされたから」（NCP第60項参照）なのです。

29. これからの数か月、数年に向けて、アングリカン・コミュニオンの諸教会が、四つの器によって確立された枠組みの中で、良心に従い、適切な寛容さをもって、共に歩み続ける道を見出せるように、共に祈りましょう。「信仰における一致」と「神の御子の知識」において、互いに愛をもって励まし合い、「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」道を

見出せるように、祈りましょう（エフェソの信徒への手紙4:13）。